



営農支援係  
坂本 恵一  
〔小麦・農産物検査担当〕

\* 今月号は私が担当しました。

## 米の生育後期の病害虫について

ここ数年、夏場の天候不順が増えてきました。その影響で、これまであまり発生が目立たなかった病害虫が目立つようになりました。今号は、米の生育後期に見られる病害虫の中で、近年、注意が必要なものを選びピックアップしてみました。

### 病害

#### ◆ 紋枯病(もんがれびょう)

昨年度は「彩のきずな」を中心に、様々な品種で発生していました。この病気は気温が高く、株内が多湿の時に発生しやすい病気で、そのため、密植栽培や多肥栽培している圃場、あるいは、中干しが不十分な圃場では、株内が混み、圃場が多湿傾向になります。病斑形は、基本的に小判型をし

ていて、水際の葉鞘から発生します。その後、発生条件が整った状態が継続した時、徐々に上に移動していき、最終的には葉や穂に到達し、収量の減少や倒伏を引き起こします。

#### ◆ 稲こうじ病

稲こうじ病は昨年度、「彩のかがやき」や「夢あおば」を中心に、様々な品種で発生していました。稲こうじ病の伝染源は、前年に発生した稲こうじが圃場に残留することで発生する、土壌伝染性病害です。発生しやすい条件は、出穂後の低温・多雨・日照不足で、窒素過多の圃場でも発生します。

病斑形は、稲穂に黒い団子のようなのがつくので、容易に発生が確認できます。

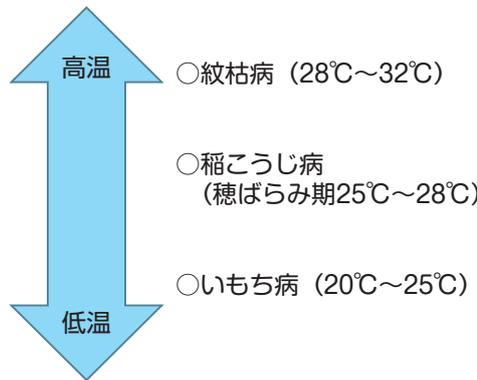
稲こうじ病で一番注意しなければいけないことは、農産物検査時に混ざっていることが確認された場合、規格外となることです。特に、飼料用米で規格外となった時は、補助金の対象外となり、経営へ大きな影響が出るので、十分注意しましょう。

#### ◆ いもち病

いもち病はここ数年、管内の圃場ではあまり発生が見られていません。しかし、夏場が天候不順で

あることから、いつ発生してもおかしくありません。発生しやすい条件は、低温・曇天多雨であり、窒素過多な圃場でも発生します。いもち病は、稲の根以外の全ての部分で発生し、生育期間中はいつでも発生する可能性があります。病斑形は、部分によって様々ですが、穂いもちの場合、穂首に褐色の病斑が出たり、穂が白くなったりします。

### 曇天・日照不足時に発生しやすい病害



### 虫害

#### ◆ 斑点米カメムシ類

昨年度は、一部の圃場でカメムシの生息が確認されました。稲の出穂前は、雑草地などに生息していますが、出穂以降は圃場に侵入します。

被害を受けた粒は、農産物検査

### 紋枯病・稲こうじ病・いもち病・カメムシ類対策の殺菌・殺虫剤

| 農薬名                 | 対象病害虫                | 使用時期                      |
|---------------------|----------------------|---------------------------|
| ブラシフロアブル            | いもち病<br>稲こうじ病        | 収穫7日前まで                   |
| オリブライト<br>250G (豆粒) | いもち病<br>紋枯病          | 収穫10日前まで<br>(但し、収穫45日前まで) |
| モンガリット粒剤            | 紋枯病<br>稲こうじ病         | 収穫45日前まで                  |
| アミスター<br>トレボンSE     | カメムシ類<br>いもち病<br>紋枯病 | 収穫14日前まで                  |
| スタークル豆つぶ            | カメムシ類                | 収穫14日前まで                  |

※稲こうじ病については、農薬散布の他、収穫後に稈選機による除去が有効です。

### ◆ まとめ

今年の夏は、気象庁の長期予報によると、暑い夏が予想されています。しかし、ここ数年、予報が外れ天候不順になることが多くなっています。そのため、常に最新の気象情報を注視する必要があります。

皆様もこの記事をご参考に良質な米生産を目指しましょう。

● 現在当JAでは、米の直接販売等を実施し、生産者の所得増大に努めています。

の時に混入が確認されると、等級低下を招く可能性がありますので、注意が必要です。